

人間環境科学科 技術・生活文化研究室

余語 琢磨



技術と文化の関係を歴史のなかで考える

本研究室は、学部では「技術・生活文化研究室」、研究科では「技術史・技術文化論研究室」と称し、私自身の担当科目は、ゼミを除くと、学部が「歴史学」「参与観察法」、大学院が「技術史・技術文化研究特論」という、少々ねじれた形になっている。研究室の名称としては、比較的風変わりなものかと思うが、その背景は、本学術院に嘱任して以降の、専門領域の近い先生方との棲み分けやカリキュラム構成に関するいくつかの経緯から生まれたものである。

総じて言えば、その研究関心は「技術史」または「技術（をめぐり）文化」という対象に集約される。「技術」という概念は、テクノロジーを扱う科学技術研究から、伝統的技術に関心をもつ道具学・民具学まで広範な分野に接続している。

いうまでもなく、人間と「技術」の関係は、古代から近現代にいたる人類史において、人間の生活、社会文化的な活動を形成する基盤としてあり、それはたんに物質的なモノの生産や交換の局面に限られず、さまざまな習俗、思考、行動のなかに現れる。その網の目のような関係性を、歴史的経緯なかに探りながら、「人間」を考えることが本研究室の目標である。そこで本研究室は、必ずしも対象時代を限定することなく、所属学生には幅広い興味関心のなかで問いを立てることを、研究室の方向性としている。

民族（民俗）考古学と実験考古学

上記のような研究方向を標榜する本研究室の方法論的基盤は、総じて言えば「民族考古学 ethnoarcheology」「実験考古学 Experimental archeology」を出発点としている。「民族考古学」とは、一般には比較的に馴染みの薄い言葉であろうが、字面のように「ある民族」の過去を考古学的に研究するという意ではない。それは、現存する伝統的文化を保持する比較的に小規模な集団を調査し、そこに特有な人間の活動パターンについて得られた知見をもとにして、考古学上のデータや伝統的な生活文化を理解する際の比較資料やモデルを組み立て（中範囲理論 Middle Range Theory）、ある仮説を検討する基礎にしようとするものである。

わかりやすく言えば、文化人類学的な民族（民俗）調査を研究調査の軸としながらデータを蓄積し、考古学的な物質文化研究の進展をめざすスタイルである。

このような方法論の確立には、プロセス考古学を主導したルイス・R・ビンフォードの果たした役割が大きい。プロセス考古学は、その理論的実践の3本柱として、民族考古学のほかに、実験考古学と歴史考古学を掲げた。その意図は、客観的・科学的な手法による事象説明を重視し、過去の情報を複眼的に検証していこうという姿勢にあった。窯業や米作りの技術、道具使用状況の探求を素材とする実験考古学アプローチも、本研究室の重要な課題のひとつである。

ただし、文化の動的な変化のプロセスを、外的環境に対する適応として演繹的・機能主義的に説明しようとする普遍化アプローチが、はたして個別性の強い文化研究、歴史研究に適切であるかについては、ポストプロセス考古学の立場からさまざまな批判が行われた。

本研究室は、その批判が示す問題指摘を検討し乗り越えを図りつつ、プロセス考古学的手法や理論的考察の成果に一定の評価と可能性を見出す立場をとりながら、考古学、文化人類学、民俗学、歴史学、自然科学などを学際的に結んでいく研究をめざしている。

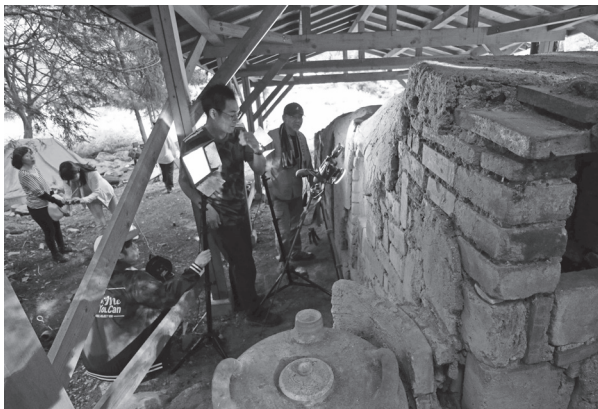
研究室のフィールド実践とおもな研究方向

上記のように記すと、本研究室の活動は「考古学」的なものに限定されるように受け取られるかもしれないが、基礎的トレーニングとして、以下のような文化人類学（民俗学）的フィールドワークや実験研究の実践経験の上に、「ひと—わざ—モノ」に関する問題系を設定し、おもに（伝統的）技術と人間生活の関係性についての過去や現在の事象を探るよう指導している。研究室に所属する学部生・大学院生が探求する研究は、「ものづくりに関する民俗調査」や「医療技術と文化的問題のはざまに現れる諸問題の医療人類学的研究」などをテーマとして展開する例が多い。

（本研究室主催のおもなフィールド実践）

- ・和歌山県田辺市を中心とする紀州備長炭生産の調査
- ・沖縄県久米島における久米島紬生産の調査
- ・中国上海市華東師範大学の学生との共同異文化調査
- ・インドネシア共和国バリ島東部農村における生業調査
- ・早大本庄校地所蔵の民族（民俗）資料の調査と展示
- ・早大本庄校地における古代窯業技術の復元焼成実験
- ・さいたま緑の森博物館における赤（古代）米栽培実験
- ・京都府京都市五条坂を中心とする京焼生産の調査

研究室だより



京式登り窯の3D写真測量調査



狭山丘陵における古代米栽培実験の収量調査

文化財調査・記録保存研究へ — 研究室体制の立て直し

このタイミングで「研究室だより」の執筆依頼を受けたので、紙面を借りて、現在取り組んでいる本研究室の新しい調査研究体制（立て直し）について言及しておきたい。

私事ながら、2016年夏に脳内出血を起こし、4か月半の入院と2017年春に復職するまで約半年間の休職を経験した。その際は、次期学術院執行部候補者になっていたこともあり、研究室学生はもちろんのこと、研究室旧助手、関連教職員のみならずたいへんご迷惑をおかけした。あらためてここにお詫びと感謝をお伝えしたい。幸いなことに、リハビリ関係者の配慮により、身体麻痺は日常生活に支障がないほどまでには回復したが、困ったことに、担当医からむこう5年の長期海外調査を禁じられてしまった。インドネシア・バリ島における伝統的ものづくりの生業調査を中心に展開してきた私の民族考古学的フィールド研究は、ここに一時的に頓挫せざるをえないことになり、研究室の学生を引率しての海外調査も断念せざる得なくなった（入院したのは、学生とインドネシアへ出国予定の約2週間前であった）。

そのため当面は、国内で中期的・安定的に展開できる新しいテーマやフィールドに切り替えて、研究室調査の軸を

再構築する必要が生じ、急遽、以下のような方針を立てた。

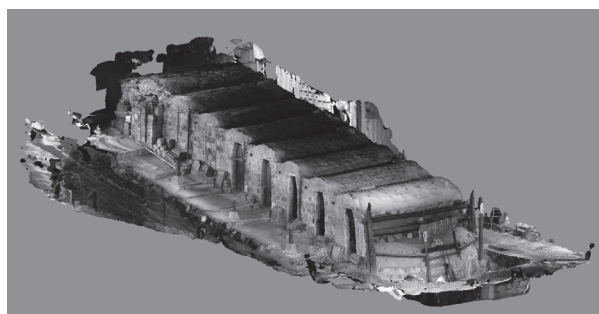
- ・テーマは、身近な文化財等の記録保存調査を柱とする。
- ・フィールドは、立地のよい伝統的産業技術とする。

前者の実践として研究室で本格的に取り組んだのが、早稲田大学津八一記念博物館や本庄校地考古資料館が収蔵する未整理の民族（民俗）資料の調査研究である。この成果の一部は、すでに『アフリカ横断一万軒 - 関根吉郎とアフリカ・マヤ資料コレクション-』の企画展示や資料紹介として実を結んでおり、またその過程で博物館展示に興味をもった学生が民俗学関係の学芸員を志して大学院進学するなどの教育的効果も生んでいる。

今後は、同様に未整理のままとなっている故・西村朝日太郎コレクションの調査研究に展開する予定である。

また、新方針2点の融合するテーマ・フィールドとして、時期の古い文化財の保存に偏りがちで、これまであまり注目されてこなかった「京都市内の近世・近代産業遺跡」の多くが、昨今のインバウンド観光ブームにおされた開発により消滅していく現状に鑑み、京都の伝統産業の中でも脚光を浴びることの少ない京焼をターゲットに、立命館大学木立研究室や早大文学部田畑研究室と共同体制を構築した。

その中心は、生産関連施設（京式登り窯、工房、職人長屋など）を対象とした、最新調査技術（3D写真測量）を駆使しての緊急記録保存調査と、高齢化が進み廃業者も増えている、熟練京焼職人への聴き取り調査である。本研究は、予備調査も含めてすでに3か年目を迎え、科研費基盤研究も獲得するにいたって、軌道に乗り始めたところである。



京都市東山区河井寛次郎窯の3D測量モデル

本来的に考古学は学融合的な分野であるが、本調査もまさに文化人類学、建築学、自然科学、歴史学などの垣根を取りはらう、本学術院に相応しい研究実践と考えている。